

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 コミュニティ看護学分野	修了年度	平成 27 年度
氏名	吉岡 留美	指導教員 (主査)	堤 千鶴子

論文題目	<b>複合震災被災者の健康保持能力と就業との関連</b>
------	------------------------------

本文概要	
<p><b>【目的】</b> 複合震災という過酷な経験をした被災者の「健康保持能力 SOC(生きる力)」を明らかにし、「A 全村見守り隊 (雇用創出基金支援事業)」の就業が健康状態にどのように関与しているかについて検討し、複合災害 (震災) 時の支援について考察する。</p> <p><b>【方法】</b> 福島県 A 全村見守り隊の就業者 196 人を対象とし、アンケート調査を実施した。日本語版 SOC-13 スケール (13 項目 5 件法) の得点と、基本属性・健康習慣指数・主観的健康感・仕事のやりがい・人間関係・ストレスの質問を、<math>\chi^2</math>検定を用いて比較分析した。</p> <p><b>【結果・考察】</b> SOC の構成要素では有意感では有意差がみられ、今の環境を意味あるものとして受け入れ、辛いことや環境の変化に前向きに取り組むことができると示され、今回の結果は、複合震災による環境変化に柔軟に対応できる住民が多かったと考えられる。また、SOC の得点と主観的健康感には有意差がみられ、SOC 得点が高い複合被災者は、自覚的健康状態が有意に良好であり、自分の健康を客観的に評価できると考える。疲労感と主観的健康感では有意差がみられ、被災後健康だと思わなくなったと答えた人が 78%のうち 67.4%からも推測されるように、被災による影響がいかに大きいかうかがえ、実際の疲労感や何らかの体調不良に関与していることが明らかになった。震災後すでに 4 年半が経過しているが、今なお多くの方が健康だと思わないと感じており、身体的・精神的な健康観をそれぞれ裏付ける結果となった。アンケートでは、「見守り隊の仕事に対してのやりがいがある」117 名 (80.7%)、「人間関係がよい」121 名 (83.4%) と答えており、今回の研究対象に多かった高齢者が主観的健康感だけではなく、「健康の保持」「社会参加・貢献」なども、関連していると考えられ、見守り隊の仕事に就き、人間関係も良好であるという結果は、健康を増進することに役立っていると推測される。また、もともと村民同士であり、さらに地区ごとに班が結成されており、新たなコミュニティを築くにはエネルギーを要するため、心の通じ合う震災前のコミュニティの仲間であったことが効果的であったと考えられる。</p> <p><b>【結論】</b> ①震災後すでに 4 年半が経過しているが、今もおおよそ 70%が健康だと思わないと感じていることから、被災による影響の甚大さがうかがえた。②仕事のやりがいは、60～70 歳代ではやりがいを感じていると答えた人が多く、人間関係も良好であることが明らかになった。③SOC 得点は全体的に低めであることが明らかになり、未曾有の災害から 4 年半経過したが、回復するにはまだ時間がかかることが示唆された。</p> <p>以上のことから、過酷な体験において健康状態を良好に維持するための方法として就業につくことは役立つことが示唆された。一方、SOC 得点が低い結果は、未だ村に帰ることもできず、環境が整わずにいる見守り隊は、災害サイクルからはまだ回復期であるのではないかと考えられ、この時期は、災害サイクルで考えると復興期と考えられるが、いまだその時期とは判断しがたく、それだけこの複合的震災は甚大な災害であったと言える。</p> <p>キーワード：複合震災、SOC、主観的健康感、就業</p>	